

巻 頭 言

「AI 翻訳」の進歩で英語の学習方法が変わるか？

NIPTA 理事
日本アイアール知的財産活用研究所
矢間 伸次



知的財産翻訳ジャーナル 第217号で紹介した朝日新聞記事「英語教育 チャット GPT で変わる？」は、京都大学 国際高等教育院 金丸敏幸准教授が話された内容である。『**必須→選択科目への議論も 入試にも波及か？**』（原文引用）

「AI 翻訳」の進歩で日本人の英語苦手は解消され、英語の障壁は低くなり、日常生活の中で英語が抵抗なく使われる時代になると思う。英語が美術、音楽などと同じ様な位置づけでカリキュラムを作れば、子供達の負担は軽くなる。彼らが得意分野の勉強や実技に時間が取れるメリットは大きい。また、受験生達にとって英語の点数で自分の進路が決められては困る。

最近、新聞記事だけでなく雑誌や書籍等でも日本の英語教育の在り方について、疑問を抱いている作家や言語学者達の発言が多くなっている。「日本人の英語苦手は文章構造の違いにある！」「今の英語教育システムに問題がある！」「子供達の英語嫌が増えている！」「小学生に、英語教育は必要か！」等。

私は英語が話せない、読めない、書けない、の三拍子揃った「英語苦手」人間である。私には能書きを垂れる資格は無い。見識ある人が述べていることや話していることを伝えることしか出来ない。しかし「文化が言語を作り、言語が新しい文化を生み出す」という基本的な考えには共有できている。

私は、なぜ英語が苦手なのか！長年勉強をして

きたのに？なぜ身に付かなかったのか。その基本的な原因は何か。元々言語の処理手順があまりにも違いすぎた。人は言語（母国語）で考えるので見方や考え方の違いは、処理する順序に現れる。英語と日本語の順序が違うことは日本語処理手順ではそのままでは乗らない。つまり日本語オペレーティングシステムでは処理できない。自分の能力無さを棚上げして、これまでの英語の教育方法に問題があったと言いつつ訳するしかない。

義務教育で英語が必要と言うならば、その目的は、英語学習を通して言語への興味を持たせ、日本語力の向上に役立てることにあるのではないか。グローバル化した社会の中で、コミュニケーションのツールとして、能力を身に付けさせることであれば、「AI 翻訳」が手助けしてくれる。世界の状況は刻々と変わって行く。「インテリジェンス力」を高めるには、まずは情報である。それには世界と繋がるツール「AI 翻訳」との付き合い方が重要となる。

英米の文化、社会、文学等に専門的興味がある人は、大学で専門的に学び、更に現地留学する選択肢もある。翻訳や通訳のプロを目指すなら、その国の文化や言語については勿論、目指す分野の専門知識も深く学ぶ必要がある。

例えば知財翻訳の場合、先ず「日⇔日」翻訳で苦学する。次は論理的に展開された文書を作るための論理力を鍛えねばならない。そして専門用語の使い方が極めて難しいため理工系学問も必要となる。現

役で活躍されている知財翻訳者は、数多くの翻訳を通じて、これらを学びながら広い世界を見ている。グローバル社会で起きている様々な変化に対応できる能力も持っている。物の見方や考え方が文化を生み、言語を生み出していることも知っている。まさに人間の知力を要する作業をしている人達である。一方これら経験から蓄積してきた知恵や知識を後進者へ伝承させる責任もある。その手段の一つに「知財翻訳検定試験制度」が有ると、私は考えている。

2006年、知的財産活用研究所の篠原先輩が発行したマニュアル「USP 解体新書」の中で述べていることを引っ張り出してみた。(以下抜粋)

注) このマニュアルは、自然科学、技術、社会技術の分野で使われる「文明の言語」で、文学とか哲学といった分野で使われる「文化の言語」とは異なる。

1. 英文和訳：日本での英語教育の最大のガンは、英文和訳という「学習」を強いているところにある。この作業は、英語文章を、日本語処理装置（日本語オペレーティングシステム）にかけ、日本語処理手順で英語文章を「解体」し、日本語順序に並べ直して、日本語文章として表現することにある。日本語処理の頭で英語に接している場合、既にそれは言語としての英語ではなくなり、解剖対象の物体のようなものとなっている。英文和訳の勉強は、英語の教科というより、むしろ国語の教科というべきか。

2. 英語の勉強は苦痛でしかない：異なる処理手順でモノを考えようとするのは、至難の業であり、頭脳に多大の負荷を掛けることになる。その作業は明らかに苦痛となる。とりわけ、なぜ異なるのかという理解が無くただ闇雲に英語を覚えることを強制されれば、その苦痛はさらに増えるだけである。

3. なぜこのような学習方法が：日本人は、歴史以来、外国から事物、概念、システム等を輸入して利用するとき、すべて「日本風」味付けをするという文化的習慣があり今も続いている。この習慣は、もちろん多くの面で利点として作用し、その結果、日本という存在の確認証明は保持されてきた。一方、欠点も当然あり、その最たるものは、海外の思想、概念、制度、システムといったものを「自己流に」理解し、それで理解したと思いつくところにある。

4. 日本風味付け：日本人は、海外の文物の取り込

みは大好きであるが、すべて日本風味付けをしないと受け取らないという文化風土の中で生きてきた。これは大きな利点であると同時に、海外の文物を生のまま受け止め、対決する厳しい姿勢に欠ける結果となっている。

5. 何でも日本語で：日本語の構造上の柔軟性と漢字、ひらがな、カタカナという便利な道具のお蔭で、そして文化風土と知識への強い需要のもとで、自然科学から哲学まで、世界の政治経済から芸能の出来事まで、何でも日本語で学び、情報を入手することができる。これが近代工業化成功の原動力となり、同時に、自分の都合の良い様にしか世界の物事を受け止められない日本人を作りだしている。

6. 英語の特徴は：1) 主体 (Subject) 抜きでは事が始まらない。Sが何であり、それが何をしているのか (V)、客体 (Subject) に何を働かしている (V) のかをはっきりさせる。流れも、このSVOに固定される。モノの見方の基本形であるから、この順序は変えられない。**2)**、自分が何者であるか、先ず主張し、その後で解説を加える。つまり重要なことを先に述べ、次第に瑣末の事項へと続く。

7. 日本語の特徴は：1)、主体が全体の中に溶け込んでいるので、Sを表面に出さなくとも、言語として成り立つ。しかも、全体の説明から入るので、Oを先頭にでも、途中にでも配置でき、何をどうしているのか、Vを最後に置きさえすれば、その途中は自由に並び替えることができる。**2)**、同じく、全体の中の自分ということから、全体を説明してから主張なり結論を述べる。これは、存在の基本形であるから、言語においてもこの順序は変えられない。**3)**、日本語には主語 (subject) が無いと、極端な意見を吐く人もいるが、主語が無いのではなく、表に出さなくとも言語としての形を取れるということである。つまり主語は存在するのだが、あからさまに表に出すことを控える、出さなくとも理解してもらえ文化の下での言語である。

◆雑記：友人Kさんの孫達は英語が大の苦手で成績が悪い。仕方なく英語塾に通わせている。その塾代は年金生活者のKさん負担である。

◆参考：米国の大学から学ぶ、理工系学部の英語教育
<https://www.ipma-japan.org/chizai-AIhonyaku/PDF/20231023-01.pdf>